

原子力問題

## 原研労組内の討論、あゆみ速報などの抜粋

2012 年 10 月作成:

(以下では、4 月 11 日行われた討論会はまだ報告されていないが、  
その討論会から 4 月 18 日の執行委員会声明が作られることになった。)

## あゆみ速報 63-03(2011年8月24日掲載)

### < 原子力問題：研究問題対策部で議論を開始 >

第63期の執行委員会の活動は、福島第1原子力発電所の事故を受け、原子力問題の議論を中心に進める方針です。研究問題対策部と中央執行委員会が中心になって進めていきますが、今期第1回目の研究問題対策部の会合を持ち、議論を始めました。第1回は、今回の事故で各人が思ったこと、これからの活動をどのようなイメージで進めるかなど、自由に意見交換を行いました。

問題は多岐に渡るため、いろいろな意見が出されましたが、ほぼ共通認識されたのは以下の2つです。

①率直であること。どういう場に出ても云うべきことは正直に言い、積み重ねていく。

②世間では、雇用や収入を中心に考える人もいるが、われわれは、まずわれわれが何をすべきか、原子力はどうかを第1に考えたい。

執行部では、研究問題対策部を中心に議論を積み重ねていくつもりです。組合員の皆さん、歩み速報への投稿など活発な意見をお待ちします。また研究問題対策部の議論に直接加わりたい方は執行部へご連絡ください。組合の中で進む議論については、順次紹介していきます。

### 第1回研究問題対策部会議[8月3日]報告:(その1)

第1回の会議では懇談形式で、各人の意見交換を行ないました

委員長(岩井) :

地震から5ヶ月、原発はもう要らないという人が増えている。自分たちがやるべきことは何か、考えなければならないことは幅が広い。今日は出だしの第一歩、皆さんの率直な意見と今後の活動へのご協力をお願いしたい。

書記長(花島) :

今回の組合の活動、まず議論をする、意見交換をするということを第1に考えている。組合として急いで結論を出すつもりはない。問題があまりにも大きく、簡単にまとまるようにも思えないし、まとめることよりもさまざまな議論、考えが示されることのほうが大事と考えるからだ。ということで、皆さん考えを出していただきたいですが、組合としての結論をすぐに出すつもりは無いです。

Aさん :

問題が多岐にわたっているので、まとめていう準備はないが、「どういう場に出てもきちんと云うべきことを言う、正直にものを言うということが大切」と感じる。きちんと活動していけばそれなりに見てもらえる。発信していく、その積み重ねが大切。その結果、例えば原子力は要らないということになって、われわれの職場が危うくなっても仕方がない。

Bさん :

社会として考えるべきこと、原子力機構として考えるべきこと、原研労組として考えるべきことがそれぞれある。私は、プラントの挙動だの時系列などの技術的なことにはあまり関心がない。サイトの処置、汚染水、廃棄物あるいは、安全な管理、許認可、防災対策などに関心がある。その点、これまで反省すべき点がある。地震学者の指摘があったのに生かされなかったとか、せっかく

開発されたロボット技術も生かされていないなど。被災者とどう向き合うか、高線量被ばく、有害とわかっている業務を人にやらせることはどうかなども考える。

書記長：

まず自分の地震体験だが、地形が変わるのを見る地震は初めて、僕の親の世代は戦争を経験したし、関東大震災も見ています。それに比べ僕の世代の日本は比較的平和だったのかと思う。地震の想定に対する見方だけれど、今回警告する人もいたが、一方でこんな地震は起こりえないと思っていた学者も多い。電力会社などがどの意見を採用かの問題もあるが、地震学者は起こりそうな地震を考えるのに対し、原子力にとっては、起こりそうな地震だけでなく、これ以上は起こらないという線が必要なのでその違いが大きいと思った。

同様のことは、どの程度の安全を考えるかの問題にも関連する。想定が甘すぎたのは確か。「想定外」は、原子力では過失傷害というような意味で犯罪だと思っている。同様に機器故障に対する備えも十分でなかった。原子力だからしっかり備えなければならないのにしっかりしていなかった。

軽水炉の問題もあると思う。核エネルギーで発電するという意味で原発には可能性があるのではと思っているけれども、今の軽水炉はだめだと思う。開発や規制の体制の問題については、技術は社会の中であって独立ではないから、その辺の問題もある。技術単独ならいけそうでも、社会の中で支えることができないようならやはりだめ。その面からやるべきでないということもおきる。技術レベルの水準問題も社会と切り離せない。

近未来の問題では、広がってしまった汚染にどう対処するか、低線量被ばくの害に対する保障体制の構築をきちんとやらなければならないと思っている。

委員長：

事故問題の講演会などで、「あなたたちが、ちゃんとやってくればこんな事故は起きなかったのでしょうか」といわれる。全面的に我々の責任という訳ではないが、一定の責任はある。原研はいろいろやってきた。受動的な安全炉なども考えられたが、軽水炉は安全性が実証されているからそれで十分、余計な研究はやめろといわれてきた。選択肢を提示するべき役目なのだが... 将来を見据えて、エネルギー源として原子力が必要かどうか議論すべき。原子力をやめるにしても、放射能をなくすことはできないから、処分方法、保管方法などの課題がある。基礎研究をやっていればいいのではという人もいるが、そうは思わない。「原子力にまだ芽がある」というと批判されるが、普通の住民の批判は率直に受けてでも、考えはちゃんと述べたい。

この活動のまとめ方だが、それぞれが一定にまとまった複数論の並記でもよいから議論の結果を出して行きたい。

隣の組合は、「高速炉も含めた核燃料サイクルは必要だ。ポピュリズムに則った脱原発というようなものでやめてはならない」とビラに書き、国会議員にも働きかけている。軽水炉が必要かどうか、議論すべきときにその先のプルトニウム利用まで、当たり前のように言うことに違和感がある。いったん元に戻って、原子力をエネルギー源として必要なのか、使うならどういう条件が必要か考え直すとき。

雇用問題をどう考えるかの質問が、マスコミからあった。原子力をどうするかの議論において先に雇用を考えるのはおかしい。雇用のために求められていない仕事をするつもりはない。後始末の仕事はあるが、運転関連の会社などの雇用環境は大きく変わる恐れがあり、雇用問題の不安がでるだろう。でもその議論が先にたつべきでない。問題はもっと大きい。

\*\*\*\* 続きは、次号 \*\*\*\*

**あゆみ速報 63-04(2011 年 9 月 1 日掲載)****第 1 回研究問題対策部会議[8 月 3 日]報告:(その 2)**

副委員長(小松崎):

福島原発の事故が起き情勢がガラッと変わった。周辺の人も茨城の人も放射能を心配している。それには、アドバイスなどを真摯に対応する必要がある。真実を言わなければ機構の信用がなくなり、存続にかかわる。どうすれば健康が守れるか、きちっと対応できる組織になれると思うし、ならなければならない。チェルノブイリでは、半径 300km といわれた。神奈川県でもお茶葉にでた、毎日のように飲む健康にもよいものが飲めなくなるのは大変なこと。国民の立場で正直に対応できる組織になりたい。

C さん:

いろいろあり、考えは移ろうが、NEAT で、対応したり、昨日(8 月 2 日)の東海村のシンポジウムも聞いた。当事者には身の上のこと、避難して別の仕事をしろといわれても簡単に転換できない。牛を飼うとか決めて仕事はこれで行こうとした人生がかかっている。シンポジウムでは、リスクの話で、絶対的リスクと相対的リスクとか数値化する話に対して、東海村村長が「人が何人死ぬとか数値化することに違和感がある。ふるさとを失うリスクはどう考えるのか」と言っていた。

東海第 2 原発で事が起こったら、30Km 圏内に 94 万人、これをどうするという議論がなくて、自分がその身になったらという考えを忘れていて。原発を作るのは政治だが、そもそもなぜ原発を置くのかというところは、原発に理解があると思われる東海村の人たちでも疑問を感じていると思われるニュアンスの発言があった。安全を担保してくださいよということだろう。

福島原発、大丈夫大丈夫と言っていて、何だこのていたらくと私でも思う。安全を担保して初めて成り立つものと感じた。逆に見れば、安全を担保できないおそれがあるなら、これ以上はできませんと、限界をちゃんと云っていれば少し違ったのでは。またこの次、大きな地震が来たら、こういう経験があった後なので、それに耐えるものでなければならない。

危険の指摘をしたら、より強固な安全につなげるものとして、「よく指摘してくれたありがとう」と云うような仕掛けができないかなと思う。がしかし、実際は「余計なことを言うな」といわれる現実。それでは、原発のような危険なものを設置する、専門家としての技能がない集団だと思う。この辺を踏まえていない集団だと危なっかしくて仕方がない。危険・安全を科学として率直にちゃんとのはかる必要がある。

日本は資源が少ないから国策として原発というのは理解するが、それにはリスクがあるということを考えたのだということが必要。「必要なだから作っちゃえ」ではいけない。労組として何を云うか、そもそも論までふみこむ。

2011 年の日本では手に余ると考えたとき、ちゃんと評価できるのか、あるいはもう少し何とかすれば、何とかなるとか評価しているのか。

書記長:

「評価している」と言っていた。そして「起こりえない」と言っていたことが、起きてしまった事で、評価のシステムそのものが根底から疑われているというのが今の状況。

C さん:

今回、地震、津波にあつてこういうことになったが、また今度きたら、それがほかの地区でも、それに耐えなければならない。

委員長:

いろいろなものが信用されなくなった。研究機関としてやってきたことも不十分だった。電力会社もろくでもないことをしてきた。「何も信用できないならこんなものはいらぬ」というのはごく自然。信頼、信用を前提としなければ話はできない。だがそう簡単にできない、しかしそこからでない。

書記長：

率直であり、それが信頼されなければ、進められない。

Cさん：

そこを取り繕おうとしたらだめ。

Dさん：

NEATの相談窓口、「健康に問題がないよ」との資料ばかり用意されていた。相談内容では自分が危険だと思えばそう言った。率直であることが本当に大切だと思う。これからも気をつけたい。

想定外と言われるが、ワーストケースデザインという考えがあって、いろいろ条件が重なった最悪のことを考える設計手法だが、そのようにできる限るのことはやった上で、国民がどう判断するかで原子力の今後が決まると思う。

Eさん：

電気料金体系、電力会社が儲かる仕組みになっている。潤沢な資金で、学者などをひきつけられるものがあるから安全神話などが作られる下地がある。電力会社を国有化するなど、必要以上には儲からないシステムにする必要がある。金融で護送船団方式というものがあるが、原子力もそんな風になっているのではと思う。職を失うか、との話があったが、たとえば核兵器工場、平和ならいらぬ。雇用優先でなく考えることが必要。原発をやめていくとしたとき、どのような形でやめていくか解からないからイメージがわからないが、そういう選択肢も出てくると思う。

東海村で行われたシンポジウム、専門家が住民にちゃんと応えていないという感じがあった。たとえば「地震や津波、専門家が指摘していたじゃないか。知っていることを聞かないリスクはどう評価するのか」などの声があった。事故は今の技術水準をあらわしているのであって、技術を改めて評価しなければならない。今の人間には扱えないように思う。

書記長：

実証済みの裏返しですね、事故が起きて現状の技術水準では危険だということが実証された。

Eさん：

われわれの旧サイクル機構の工場でも、事故はそのときの技術レベルをあらわしていたのだけれど、技術レベルが露呈するのを嫌がって事故隠しが行われてきた側面がある。レベルが低いと思われるのは嫌なことなのだが、みんなで認識しながら進むしかない。しかし、現場ではそうならなかった。原発事故が起きたことも素直に見るしかないと思う。脱原発=脱原子力ではないと思うのだけれど、その辺がよくわからない。軽水炉が発電方式として否定されているのではと思うところがあるので、その辺を整理して考えたほうがよいのではと考える。軽水炉は扱いきれないと云う意味で、われわれの職場で脱原発を言ってもよいのではと思う。組合として何が言えるかという点では、今後どうするかは難しいところがあるが、結果論としてこれがまずかったということは何点か指摘することができ、組合としてまとめられると思う。

Gさん：

私は個人的には原発反対なので、今みんなが脱原発といっていることは喜ばしいと思っている。今、「脱原発と言っているのが全原発の否定ではないのではないか」とおっしゃっていましたがそんなのは甘いです。脱原発と言っているのは軽水炉だけと言っているのではない。それをどうクリアしていくかというのが今後の課題。軽水炉だけだめよという脱原発で労組の考えをまとめるというのは無理だと思う。私は原子力に関係

がない世界から、この世界に入ったのだが、原子力の平和利用という言葉に違和感があって、なんだろうと考えると、反対側に核兵器があるから平和利用なんだと気づいた。核兵器がなければ、平和利用という言葉は不要で、単に利用という言葉ですんだはず。平和利用ということは、原爆になるよという話があるのであって、何で原爆がだめで、原子力がいいんだというのは理解に苦しむところなのだが、縁があってこの世界に入ったので、自分のやるべきことをやってきた。いったん国策としてはじめてしまった以上、こんな失敗は本来あってはならない。スリーマイルの時だって、チェルノブイリの時だって、「日本ではあんな事故絶対に起きない」と言っておきながら、チェルノブイリに匹敵する事故が起きている。この事実をどう考えるかという話。今まで言ってきたことがみんなうそではないかといわれても否定できない。だからといって今この時点で、委員長が外部の講演会で参加者から言われたように、「あんた達がしっかりしていればこんな事故起こらなかったのじゃないの」と言われても、困る。

委員長：

全面的にはないが、一部の責任はある。

Gさん：

我々は、プラントにかかわっていたわけでもないし、そういう立場にあったわけでもないのだから、理不尽なことを言われるのは耐えられない話。

委員長：

一般の人には期待感があったのでしょうかね。

Gさん：

一般の人が期待するのはいいのだけれども、それを個人に向けていってもらいたくはない。組織に向けて言うのはいいのだけれど。

委員長：

「あなたが」ではなく「あんた達が。」と言われたので、そういう意味では、個人に向かって強く言ったのではないでしょう。労組としては、組織に対して、いろいろ言ってきた。声が小さくて役には立たなかったということはあるが、我々なりに努力はしてきた。その点はそれなりに主張していくべきと思う。誰かさんみたいに「もっと力を入れるべきだった」と反省する必要はないと思う。「その結果がこの事故でどうしてくれるの」と言われれば、それはそれで問題なのだが、この事態に至っても我々の活動が全否定されるものではないと思っている。

Gさん：

労組として何を情報発信していくかというのは、非常に重要なことで、よく考えて、冒頭にあったように、議論してすべて、オープンにしていくというのはいいのだけれども、多岐にわたりすぎるので、それをばらばら出していってもしょうがないような気がする。

書記長：

対立する考えを並べるにしても、論点が整理され、それぞれにある程度体系が見えるようにまとめ、こちらの考えの体系、あちらの考えの体系のように出して出したいと思っている。だからある程度揉んでいって煮詰める必要があると思う。

Gさん：

社会として考えるべきこと、原子力機構として考えるべきこと、この2つが背景にあって、組合として何を言っていくかだと思う。その考えをどんどん出し合って、すぐに出すべき。この集まりを持つのが遅すぎた。もっと早くやってしかるべきだったと思う。「何で労組は何も云わないのだろう？」と思っていた。現場が忙しいのだろうとは思っていたが、それでもやはり、現場をおいてもやるべきだったと思っている。

Hさん:

特に考えてこなかったのだが、いままでの話を聞いて、まず、脱原発というのは、反原発に対する言葉ではないかと思う。最近できた言葉。反原発というのは、今日にでも原発を止めにして今後一切も止めろというようなニュアンス、脱原発というのは、とりあえず今動いているのはいいけれども、それが終わるころには終わりだ、というような違いでは。以前は、反原発の人と原発推進の人たちの議論で、そこではまったくかみ合わないところがあった。反原発の人は、危険がちょっとでもあれば、「そんな危険なものは絶対動かしてはいけない」と言い、原発推進の人は「そういう危険は限りなく小さいのだから、エネルギーのことなどを考えたらこれはやらざるを得ないのだ」と言う。そこは絶対にかみ合わない議論。議論しても溝は埋まらない。

「危険だ」と指摘すると「何でそんなことを言うのか」と非難されることがあるが、それは少しでも危険だというと、「止めろ」という反原発の考えが一方にあって、研究して危険が見つかったら改良していくというのは、反原発の考えと相容れないからではないか。危険があるとすると、反原発の人に「だから駄目」と言われることを恐れる。それに対抗するために、推進側は100%かのように「安全です」という。だから新たに危険が見つかるのは駄目だということになる。そういう対立があるから、率直でない体質、社会が作られてきたということがあると思っている。「危険がゼロでないから止めろ」というのはある意味で正しい。だけど、ゼロでなくとも、社会のリスクとして受け止めることを考え、「リスクとメリットを勘案して動かしましょう」という選択肢もある。どう思うか社会の選択だと思う。

僕としては、100年、200年先を考えたら、原子力であるかどうかは別にしても、化石燃料に依存しきれんとは思わない。その意味で原子力には賛成です。だけど今そんな理屈を言っても納得されないと思う。

原研労組として、議論して何かまとまることあるとは思えない。有益な提言をできると思えない。今役に立つこと、事故の対処として役に立つようなことや、今動いている原発の安全に必要なことを言っていきたい。原子力機構をみると、もっとやれることがあるのと思う。組合からもっとこれをしろと言ってもよい。

雇用の問題、考えたこともなかったが、今それを考えちゃいけない。社会の役に立っていないと思うなら要らない。役にたっていないと思われたくないからではなく、専門知識を持っている人間としてはもっと貢献すべきと思う。

Jさん:

福島に除染に行ってきたのだけれど、かなり成果があったと思っている。「もんじゅ」に1日5000万円かけているくらいなら、除染にお金をかけたほうがよいのではと思う。安全研究センターでは、炉心損傷にいたる確率を出すために、確率論的安全評価(PSA)というのがやられていて、その中で、炉心損傷の一番の要因がこの全交流電源喪失だったのだけれど、それがわかって、リスクグループの人が、当時の原子力安全委員長に対策を採るように言ったのだけれども、十分な対応がなされなかった。言うことを聞かないような人だから安全委員長になれたのかもしれないが、研究しても上に立つ人が汲み取らないのでは、研究が役に立たない。

私自身、事故が起きるまでは、「制御棒を入れたら原子炉は止まる」と教えられてきたので…… 研究炉の僕の同期の人もそう思っていたみたいです。

書記長:

それは工学屋の発想ではないです。素人の僕だってそう思っていない。臨界が止まるということと炉が止まるというのは全然別でしょう。

Hさん:

いやいや、そういう認識があるというのはある程度事実で、緊急冷却装置が作動すればもう安心と皆さん思っていたのではないのでしょうか。

\*\*\*\*\* 一部略 \*\*\*\*\*

書記長：

それはそうだったみたい。茨城県でほうれん草の汚染が暫定基準を上回ったときがあったでしょう。その時ある県会議員から、「汚染が出て、初めて県の役人が慌てた」と聞いた。それを聞いて私は、びっくりした。その前に全交流電源喪失があったのに、そこで怖がらないでいる。一般市民はともかく原子力規制の関係者は、どんな弱点があるかをもっとわかっていなければいけない。

Eさん：

全電源喪失、朝日新聞に出ていたが、1970年代に外務省が委託して、テロ対策関連で全交流電源喪失を研究したのだけれども、そこでの事故の進展は今回の事故と一緒だと書いていた。反原発が恐ろしくて公表できなかったというようなことが書いてあった。

\*\*\*\*\* 一部略 \*\*\*\*\*

書記長：

一通り話を聞いて少し整理したいのは、反原発・脱原発の話、それは無視できないけれど、そのスローガンそのものは議論しないほうがよいと思う。具体的にどうするか、つまり軽水炉は駄目と言うか、将来も含め原子力は駄目と言うかは議論しても、それを単純に反原発や脱原発が良い悪いとか言わないほうが良い。私が思うには、一般の人から見たら、原発といえば軽水炉、BWRとPWRしかない(他はもんじゅ位か)と、今そばで動いているものしか考えていないのがほとんどの人。昔からの人は別にして、そのほとんどの人が、いま脱原発や反原発になったからといって、それをどうこう言っても始まらない。ただ我々が原子力を将来のエネルギー源として考えるなら、それはそのこととして言って行きたい。実は私は、ある場所で「今の軽水炉は駄目だが、原子力を将来のエネルギー源として考えろ」と言っている。なぜそう言っているかというと、原子力開発の初期に軽水炉がなまじうまく行き過ぎて、ほかの可能性の芽がつまれた。原子力潜水艦ができ、PWR,BWRができ、発電ができて、そこそこ安全に運転できた。そこで急にたくさん作り、大型化もしてきた。核エネルギーを取り出すにはどうしたらよいかについて、安全性や廃棄物の問題も含め、本当の意味で突き詰めて考えていないと思う。行けいけで今に至った。突き詰めて考えても良い解がないのかもしれないが、現段階では、その可能性を十分探ったとは思っていない。

一方、エネルギー源としては、当面原子力は要らないと思っている。なぜなら、原子力が電力の3分の1というが、総エネルギーで見ればわずかなもの。その分が絶対なければならないのかといえば、そんなことはない。火力発電を増やすなり、いろいろかき集めるなりすればよい。しかし今の状況がいつまでも続くとは思っていない。CO2増加とは関係なく大きな気候変動は必ず来るし、そのとき莫大なエネルギーが必要になるかもしれないと考えている。だから、きちっとした技術で、開発できるものは進めて行きたいと思ってる。本気で。ただ今回のことをきっちり反省しておかなければならないと思う。

\*\*\*\*\* 以下略 \*\*\*\*\*



あゆみ速報 63-13(2011年12月26日掲載) \*\*\*\*

## 討論会報告(11月1日) これからの原子力をどうする？

### [ 開発と規制の体制作り、人材育成をどうすべきか ]

執行部の準備不十分で参加人数は多くはありませんでしたが、有意義な意見交換がなされました。表記の課題について、[こうすればよい]というものは出ませんでした。これまでの問題点など多く示されています。

委員長(岩井): お配りした資料もありますが、6月20日に理事長がこれからの機構について、今年度できることは今年度やり、来年度は組織を大きくいじくると言っています。一方国のほうで、原子力安全庁について、日経新聞の記事、原子力機構、放医研、産総研の原子力安全にかかわる部分を、新しい安全庁下に集めるといった構想の報道もある。原子力事故再発防止顧問会議は、飯田さん、元原研理事長の松浦さんなどが名を連ね、国のほうから検討課題として、規制と利用の分離、安全規制業務の一元化、危機管理の担当: 司令塔をどこにするかの問題、人材の確保や規制の仕組みを見直すことなどの課題が投げられています。会議の内容はホームページで公開されていて、松浦さんたちが連名で12枚もの意見書を出しているのも見える。

来年度4月に原子力安全庁発足として、年内には全体像を決め、通常国会で決めていくつもりらしい。われわれは、開発と規制の体制、人材問題について、組合として早い時期に言うべきことを行って行きたい。組合としてどういう観点で議論、意見を言うていくか忌憚のない意見をお願いしたい。

司会(小松崎副委員長): 委員長からありましたがいいたい事をどんどん出していただきたい。

#### ——原子力安全庁が機能するには？——

Aさん: 閣議決定された、原子力安全庁ですが、環境省の外局で、独立性が保てるのか疑問。今の原子力安全・保安院と何が違うのかわからない。環境大臣から許認可をもらうようになるのか。独立性を高めるには、せめて第3条委員会で規制されるべきではないか。臨界事故の後でもそんな話があったが、そうならなかった。環境省は小さな省、十分な力をもてるかも疑問。

司会: 権限が弱いとかマスコミ等でも言われている。

Aさん: ドイツと日本は質が違って、さっとやめることができる国なのに一方は事故を起こしておいてやめることができない。人として信用できないところがある。

岩井: 松浦さんたちも言っているが、実質的に独立ということは、省からも独立されるべき。

安全庁が考えた方針で、規制できる。大臣は政治家ですから、政治家からの圧力も廃せるようにする必要はある。

#### ——人材が問題——

書記長(花島): 私は、アイデアが出てこない。「分離」は概念としてよいのだが、誰がやるかが問題。人がいない。上の人は事故に責任がある人ばかり、「危ないからやめろ」と言ってきた人はいない。安全のための規制を権限と能力としてみれば、権限の面では今の動きは一応「独立した機関で」ということで進もうとしているが、一方では規制できる能力のある人をどこから、もって来るかという点では、難問がある。私は、今の軽水炉はやめるべきと思っているが、将来を考えると開発を進めるべきと思っている。もっと安全な原子力というものを考えたいのだが、その開発を進めるについても同じ、進められる能力のある人材をどうするかと考えると難問だと思っている。規制と推進の分離は必要だが、分ければいいというものではない。確かに、裁判のように、検察と弁護というように立場を分けてせめぎあいの中から、結論を出そうという

形はよい。しかし、ことは難しい技術がからんでいるので、たとえば規制の立場で厳しければよいというのではない。技術がないと、意味のない規制ばかりして、本質を抑えられなくなるし、規制される側から信頼されることがない。推進側についてみれば、安全を守りつつ、しっかり開発を進める、あるいは運転していくのに能力が要求される。どう考えてよいのかよくわからない。

今の日本の原子力を見ると、草創期に東大原子力工学科第1期で安齊さんが、ちょっと原子力に批判的だったところで、干されたり、監視をつけられたりしたけれど、そういったことが脈々と続けられてきた歴史がある。原子力がひとたび大事故を起こせば、国の危機になるんだという認識で仕事を進めてきた人は、上のほうにはほとんどいないのではないかと思う。そういう人たちが、今回の事故でどれだけ反省しているのか。反省している人はいると思うが、社会としてどう使えるか、非常に悩ましい。根底から考え直さなければならないと思う。細かいことでは、大学とか機構などにおける人事制度、評価の仕方とか考えなければならない。一方、私が言っているのは、非常に高いレベルの安全性を求めるための考えであって、現状はそれ以前にずっと低いレベルの話になっているという議論もあるだろう。ある場所で言われたのだけれど、たとえば六ヶ所村の施設の認可をお願いするほうと、認可するほうがともに同じ、旧サイクル機構から行った人だったりしているように、現状はもっとずっと低いレベルの問題。だから今進められていることは、よりよい方向なのだけれど、もっと先、より高いレベルの安全を考えるには、もっと難しいことも考えなければならないと思う。根底から。なぜこうなったのか。

顧問会議のメンバーを見て、批判派の飯田氏が入っているから「あ、そうか少しはましか」と思うけれど、それを超えて今後どうすると考えると、途方にくれる。たとえば、うちの理事長が何でこういう人が、ということ。JCO 臨界事故が起きた時は間違ったことを言っていたし、原子力安全委員長の時では今度のようなことを防げるようなことをしてきたように見えない。今回の事故の後だって「国の危機だからがんばれ」と言っているが、自らの反省の弁が聞こえない。東大の原子力工学の先生だったし、原子力安全委員長でもあったのにです。学問の世界の業績は知りませんが、技術や安全を守るという点では能力ない人だと思っている。

#### ——誰も責任を取らない——

今回の事故で驚くことは、こんなとんでもない事故が起きたのに、今までの原子力安全委員会が指弾されるわけでもなし、今の委員が辞任することもない。どうなっているのですかと思う。ほんとに「想定外だからしょうがないよね」って思っているんでしょうかね？

司会： 東京電力も想定はしてましたよね。想定する意見も社内にあったけれど、副社長がつぶしたとか言われています。

Aさん： 東電は自分で分析して、危ないと分かっていたはず。経済産業省に至っては古くから委託研究を出していた。その報告なんか今回のことをぴたり当てている。

書記長： 私の用語で、想定外と言っているのは、システムとしての想定になっていないと言うこと。一部の人が懸念していたというだけでは想定していたということにはならない。

Bさん： 貞観地震が大きな津波を起こしていたという指摘が、委員会で出されていましたよね。

書記長： 産総研の岡村氏でしたっけ、委員会で指摘していましたね。委員会の記録を見ると、東電は指摘に対して、津波を小さめ小さめに見ようとしている。

Aさん： 学者さんでも警告している。各種の委員会にはちゃんとした意見の人もある。だけど、多くは無視されて終わる。人材に戻ると、うちの理事長みたいな人を安全委員長にははいけない。いろいろな委員会に真面目な人はいます。東電が金を使って、政治的なことを優先して考える人が集まっているのか？

書記長： そこがよくわからない。政治的なことを考えていても、本当にこんなことが起こりうるぞと考えたら、そういう加減なことはいえないように思うが。 何で上のほうには.....

Cさん：人がいないと言う指摘。前の戦争、敗戦になって、価値観が180度変わったという経験があるのだけれど。

書記長：根性が変われば、今は能力がなくとも、いい方向に行くかもしれないけど。

敗戦で言えば、日本の保守層の考えは、「アメリカと喧嘩したのがいけなかった」と言うことで、他国を侵略をしたことの反省はないと言う話を聞いたことがあります。。。。。

Bさん：都合の悪いことは起こらないだろうと考えて進めるのが、前の戦争と、今回の事故の共通点。

Cさん：都合の悪いことがあると指摘できないようにしてきたことも共通です。

#### ———本当の反省を！ 原研労組は指摘できる———

Dさん：私は、前の戦争と原子力、似ていると思っています。国民として反省できるか？ 今度もそうなのか？ 原子力を急激に進めたのは政治的だった。はじめは正力、次は田中ですか、昭和60年代に6000万キロワットですか。ぶちあげて、進めた。津波が起きたという問題は置いて、構造として、本当に人はいなかったということではなく、育てる環境がなかったということで、その反省が必要です。原研の労働組合は、ずっと研究者・技術者の意見を尊重し、言わせようとしてきた。そのためにロックアウトや処分問題があった。先輩たちはいろいろやってきたが、それを押し返す力がなかった。ただ、労組は少なくとも、このことを指摘する権利はある。技術と政治がつながりすぎるとよくないということ。

JCO 事故時現場に行きましたが、みんな手が震えて指令が出せませんでした。日本が原爆を落とされたときもそうでしょう。政治と技術がきっちり切り離せない限り、原子力をやってはいけいではないかと考えるし、原研労組はそれを言う権利があると思います。

能力がなくとも、技術の問題を純技術的に議論できる体制を作るかどうかだと思います。「むっ」だってそうだ、安全委員会を作ったが....。原子力損害賠償法が作られたとき、「手に負えないこともある」と考えたはずでは？ 技術と政治を切り分ける必要があると言えるのはわれわれ原研労組。

#### ———評価の在り方にも問題あり———

司会：旧サイクルでアスファルト固化施設の火災爆発事故が起きたときも、昔のスケジュール優先で現場の危惧を無視して進め、現場の業務は下請け任せにしてきた、そんなことも事故の要因だったと思う。労働者の差別もやってきた。東電なんか徹底してそうやって来たそうだ。労働者だけでなく、顧客に対してもあいつは反原発だとか言って差別してきたと聞きます。人の面では、事故隠しをやって、おまわりさんにも逮捕されるような人が出世している。旧サイクルでは、そんな人が多い、真面目な仕事で評価されるのではなくて出世する人が多い。真面目に仕事しても出世しないという風潮があつてよくないと思う。

最近、再処理施設スタックダクトに穴が開いたと言う話が出ましたよね....

政治と技術の面からは外れますが、旧サイクルでは、パソコンをたたいて学会発表をしている人は能力が高いといわれ、現場で仕事を毎日チェックする人は能力が低いと言われる。そういう評価制度にも問題がある。

Cさん：それは日本の原子力職場の縮図では、研究現場と違い、技術的には黒でも政治的に白にされて推進されることがある。

Bさん：計算のうまい人が上に上がれなくなって、天下りするという構図も問題ある。

東電が儲からない構造にするしかない。総括原価、オール電化の宣伝費まで入っている。かかった費用を増やせば儲かる仕組みと言える。

#### ———安全に金をかけることはできたはずだが———

委員長：そういう意味では、安全に費用をかけることができるはずだった。そして性善説、すべてのものをチェックしては来なかった。シビアアクシデント対策、自分でやっておくということだった。規制側がもっとこと細かく規制しなければならなくなっているのでは。

書記長： やっていないとわからないものがある。原研でも、いろいろ難しいコードを開発してやってるだろうけれども、自分でやっていないできちんと規制できるとは思えない。たとえば確率論的リスク評価など、どっから持ってきたバルブの故障率はこれこれです、電磁弁の故障率はこれこれですなど信じて積み上げたら、とんでもない結論が出ると思う。

委員長： 机上だけの勉強ですまない。だから、メーカーなどからの採用で人材を得る必要があるが、規制に回ったときにきっちり規制の立場で仕事をできるようにするようにはシステムとしてどう作るか。処遇も必要、役人の世界では動いて行って出世する仕組み。そこも変えていかなければならない。

茨城の原子力安全対策課、原研が人を送らないとなり立たない。一方福島県では、学卒を採って、その部署の中で処遇していつている。規制だけずっとやっていても、きちんと評価処遇している。

書記長： 処遇、きちんと規制の仕事をしたら…

政治の理念がしっかりしていなければだめ。安全にコストをかけても元は取れるシステムだとの話もあったが、単純にお金でない別の意味のコストの問題もある。とんでもない津波が来たらどうなるか考えるとか、サイト全体を免震構造にするにはどうするとか、どういうことが起きたら全電源喪失になるかとかを検討したり対策したりするのは、金銭以外のコストがかかる。ぼんとお金を出して解決する話ではない。だから電力会社はやらなかったのだと思う。単純にお金で済み、本当に危惧したなら電力会社でも対策していたと思う。元は取れるのですから。

ただ、一方で、「そんな心配ない、何でそこまで考えるんだ」と言う学者などが居て、進まないでしょうが。

処遇は発表の自由と一緒に、非常に大切な要素だと思いますね。今度の事故で線量率の測定で、某基礎センターで勝手なことをするなという話が出たという。大本営発表みたいなことしか許さないというのは問題がある。

#### ——発表の自由、意見表明の自由が大切——

委員長： JCO のとき発表規制が掛かった。それはよくない。機構の責任でどんどん発表すべきと思う。

書記長： JCO 事故の時のかん口令、何で？といえば、学問的価値をチェックするとの理由。最後の承認者が副理事長だったのだけれど、副理事長は官僚出身で研究者でも学者でもない。一般の外部発表は部長が認めれば OK なのに、別にする意味が分からない。

B さん： たとえば電話相談でどこまで自分の意見を交えて話したらよいのか？ICRP の勧告は絶対正しいのか、ECRR(欧州放射線リスク委員会)についていったら、どうなるの僕？低線量被ばくについて「本にこう書いてありますよ」と言ったらどうなるのかとか考えてしまう。

書記長： どうなるかは知らないが、本人の考えで言えるべきだと思う。

司会： 機構は「100mSv 被曝しても安全です」といっていますよね。

書記長： 前のリスクコミュニケーション室の資料にはそう書いていた。おかしいのは、ICRP が言っているアウトな値、100mSv で 1000 人に 5 人が致死発ガンというやつを言っていて、そのあとで、100mSv 以下だったら問題ないかのように思わせようとしている。書いている人、科学者じゃない。

司会：「年間20mSv 被ばくしても安全です」とかも言っていますが、僕ら、長年放射線作業従事者をやっていますが、会社で20mSv 被ばくしたらおおごとですからね。そこを一般人が20mSv 被ばくしてもいいんだという。とんでもない話です。

D さん： 一番悩むのは放管の人、日常はきちきちにやっているのに、自分がやっていることと矛盾することを言われる。うつになる人が出てくるは無理もない。

書記長： 人材問題とは違うけど、多くの放射線作業従事者に違和感があったのはそこでしょうね。職業人が日常の仕事でマイクロシーベルトの被ばくだって、できれば避けるわけでしょう。それを一般人に対してなんということをと。

書記長： 原点に戻ると、平和利用三原則とか。それから、われわれの先輩たちが、原研が財団法人のときから早々と労働組合を作ったこと、何でそんなにすぐに作ったのかと考えると、圧力を受けるだろうと考えたのではないか、そういう面でも組合が必要と思ったのではないか。

司会： 自主・民主・公開 全然守られていませんね。

——原子力はいらないと思っている人が規制するくらいのことを——

Bさん： 規制という面では、原子力はいらないと思っている人が規制をしていてよいと思う。技術的に分からないことがあるとき、僕らが入って助言するような形。

書記長： それは同意します。脱原発どころか反原発みたいな人も入って規制するという仕組みが必要では？

Bさん： 私は、正直原発は要らないと思っていますが、「はいらないと思っ居るけど、どうしてもやりたいなら、最低限こういふ風にしなさい」みたいな姿勢での規制を考えます。

書記長： 僕も現時点で要らないと思っ居るが、ただ将来を考えるだけ。今は電気は足りる。

Bさん： 将来で言えば、中国なんかがどんどんやればウランなんてすぐなくなる。

書記長： 核燃料はウランだけではないですよ。

司会： いや、収集技術が進めば海水からたくさん取れるのでは？

——原子力安全庁と原子力機構はどういう関係に？——

Cさん： 原子力安全庁というのが出来て、原子力機構が傘下に入ったら機構はどうなるのでしょうかね。

委員長： 実際どういう風なイメージがあるのか分からない。規制のバックアップは当たり前で今までもやってきましたが。

Aさん： 動燃部分だけで言えば、棺桶に入れる、収棺するというイメージで見えています。

委員長： エー。 原子力安全庁に機構の一部分が移るということをイメージしたとき、どのようなものですかね。

Eさん： 規制のための研究。役人だけだと分からないから、規制の官庁が規制のための研究機関も持つとしか思えない。安全に関係する部分を切り離し、安全庁に持たせて、ほかは行政改革の中で.....

安全にかかわる部署はどこかと考えると、安全研究センターとか。SPEEDIは環境安全センターの中の環境安全研究部だったけど、「原子力事故は起こらない」と田中俊一氏に言われて、環境安全研究部がつぶされ、環境科学になった。今は原子力基礎工学研究部門に入れられている。

委員長： 「日経」の記事は、その内容ほかのマスコミには出ていないから、形が固まったものではないように見える。政府関係の誰かが考えているだけかも知れない。

研究として、安全という切り口で予算を取ってきている部分と、開発としてやっている部分もあるが、施設が必要なものでは、事業の推進と安全規制、どっちにと簡単に切り分けられるものではない。

Eさん： それは、廃棄物処理についても同じ、廃棄物を安全に扱うということは事業の推進に必要なだし...

(数人： 分けられないです。)

委員長： お金を国が出してくるのだが、松浦氏らも言っているが、安全庁がお金を持ってと言っている。

書記長： それは必要だが、安全と推進をきれいには分けられない。組織ではなく、へそ曲がりの目で見ると、Aは弱点を探す役目とか必要。

Eさん： 人材育成そのものが、原子力工学科、推進する人の人材育成になっていて、技術的な知識はあるが、ものの見方、疑ってみるとか見方が養われない。個人的な「育ち」とかでしかそういう見方が身につかない。上のほうは、都合の悪いことは黙っておこうというような人たちが先生で教えているわけだから....

Aさん： 鈴木先生は、1987年 FBR 再処理委員会、末端に居たのが鈴木先生、その当時から政治家の

世界に居た。旧サイクルでは、委託研究を出したりのお金で、いろんな先生を買っておくんです。小遣いをあげるように。

委員長：今の大学教授は、大学に居ないことが多い、お金を集めたり。大学が、買収されていると難しくなる。

Eさん：環境放射能測定でもフットワークが軽かったのは、原子力の恩恵を受けていない理学系の人たち。原研で環境放射能をやっていた人たちは、JCO事故のときもそうだったが、「専門家なのに何やっているの？」と言われ、大学などの研究者との付き合いに亀裂が出来た。原子力学会や保物学会はプロパガンダみたいなものを垂れ流している。原子力学会などのメールマガジンなどを見ていると、ぜんぜん当事者意識がないように感じる。

規制に必要な資質の人としてみると、理学系の若い人たちなどから資質がある人を得られると思う。でも、環境関連では人材が多いと思うが、炉の部分はそういう人たちが居ない。

委員長：問題はそこにある。行政の部分はやる気があって、一定の知識と論理性、理解力があれば原子力をやった人でなくとも仕事は出来る。だけど、それをバックアップする技術系の方は、完全に安全のための原子力科学の講座と言うのはなくて、民間にもない。安全という切り口で委託研究などを出しても、一方で、推進側からの委託などを受けていけば、ジレンマに陥って安全の見方を全うできない恐れがある。

Bさん：そのときに先に答えがあるとどうしようもない。

委員長：民間からののは、そんなものです。

書記長：私、原研で「えー」と驚いたことがいくつかあるのだけれど、最初のもがそれ。30年前入所して、ガイダンスで原研にはこんなプロジェクトがありますという説明があった。その中で、「安全性研究」を「軽水炉が安全だということを実証するためにやっている」という。聞いている人の3分の2は研究者・技術者、その前でそういう言い方。「安全かどうか調べる」でもなく、「より安全にする」でもない。スリーマイル事故の後のころなのにそう言う。今となつては、安全でなかったということが事故で実証されてしまっていますが。

Eさん：安全性研究という名前自体が日本語としてよく分からない。危険に関する研究じゃないのか？安全性研究と言った時点で、「安全だ」という結論が予定されている様でよくない。

書記長：先に結論があつてはいけないということですが、私には、「そういうことは科学や技術の世界ではまずいんだ」という認識がないということがショックだったのです。科学じゃないです、そんなのは。逆に、そんなところが完全に拭い去れば、規制と推進の完全分離をきちぎちやる必要も無いと思います。役所は別ですが、研究とか開発は何か作っていく中でいろいろなことがわかってくるもので、根性が入れ替われば、実際にやる人間は規制・推進ぐちゃぐちゃに混ざっていたっていいと思う。

\*\*\*\*\* 以下、次号に続く \*\*\*\*\*

## あゆみ速報 63-14(2012年1月4日掲載)

## 【開発と規制の体制作り、人材育成をどうするか】(11月1日) 報告 続編

## ―― 現状は役人だけでは規制できない。キャリアシステムも見直しを。――

Bさん: どうしたらいいのですか?

書記長: もうひとつ、皆さんに思い出してもらいたいことがあります。JCO事故の後、原子力業界はずいぶん反省したはずです。そう言っていました。NSネットだの、(言葉さえわすれていませんか?)安全文化だのと言っていた。ピアレビューしますとか。言っているそばから、東電のひび割れ隠しが明らかになった。それもNSネットで暴かれたものでもない。あれは何だったのか、ごく一部の人の反省だったのでしょうかね。

( オフサイトセンターに関する話、略 )

Aさん: 規制の話で言ったら、昔、科学技術庁は、核燃料規制課などに 動燃からの出向者がたくさん行っていた。行かないと規制の仕事が回らない。ずいぶん上のポストにも指定席があった。本当に推進側が規制に入ってやっているような状態だった。人材がいないのはしょうがない部分もある。再処理やっているのは動燃だけだったから。役人は、人事異動が激しくて、「サーバーメーターって何ですか」と言うような人がくる。換われば3、4ヶ月はレクチャーで終わってしまう。こっちで審査書を書いて、これで回してくださいということもある。

Eさん: それって、被告人が判決文を書いているのと一緒じゃないですか。

書記長: 犯罪じゃないから。

Eさん: でもある意味でそうでしょう。

委員長: バックアップをしないと無理。役人として動いていく人に、わかれと言うのは無理。

わかる人が居なくなって.....。

Aさん: キャリア、一番話さないがえらい人。

委員長: 役人のキャリアシステムも変えていかないと、ずっと同じ仕事をやっていくという覚悟の人、それから、それをきちんと処遇していくシステムが出来ないと。

書記長: 日本の社会、高度の専門性は馬鹿にされている。何かあれば持ち上げられるのだけど、処遇面ではお粗末。原子力機構だけでなく、日本の全般的傾向。

Aさん: 動燃は村社会、派閥、どこの派閥に入っているかで決まる。

## ―― 原研労組として何を言っていいたらよい? ――

委員長: (労組は)何を言っていいたらよいでしょうかね。Dさんが言ったように、「労組は言う権利がある」は分かりますが。

Cさん: 原子力発電をどうするのかは? 本日のテーマでは無いですが。

Bさん: 原子力機構の中では、いろいろな人、原子力に結びつかない仕事をしている人も多い。組織を切り貼りするには、そのへんも考えてもらわないとならない。

Eさん: 原研がどんどん原子力から離れていく流れだったのが、統合のとき「原子力機構」になった。

書記長: 小泉行革で、「廃止か民営化だ」と言われ、統合にしようということになったが、「原研はそもそもなんだ?」という問いに「やっぱり要は原子力だ」という話に戻った。その前の脱原子力みたいなのは、おかしいと僕は思っていた。いろいろなことをやるのはいいけれど、要となる原子力の問題を研究しなかった。批判的にやることを逃げた。応力腐食割れとか。東電のひび割れ隠しの件で言えば、「応力腐食割れは解決済み」と言われていた。ところが実際の炉で多発していた。原子力委員会だか、安全委員会だったかわすれましたが、解決したことになっていたので困り、戸惑っているのです。要するに、「解決した」なんて間違っていたというのが簡単な結論なのに、それを率直に認識できない。問題があることがわかってからその有様だから、顕在化していないときは、「解決済みなのだからやるな、やるな」

ということになる。

Eさん： そうです。 SPEEDI だって、「事故は起きないから、その技術を生かしてほかの事をやれ」といわれ  
ウンカの予測などをやった。

司会： 動燃では、応力割れは実際の施設で出ていて、調べていたけど、報告はつぶされていたと聞か  
す。

Aさん： そういふのはシミュレーションだけでよいのか、実際に追っていくべきものか？ やれるものならやっ  
ていくべきでしょうね。

書記長： ことの重大性を考えれば、当然やるべきと思う。「解決済み」というのは、たぶん、本当のガセネタ  
で無いなら、何かの加速試験か何かで解決したと思うのでしょうね。でも加速試験というのは実際の状  
況と違うでしょう。だから、一応何か見えたぞと思っても、実際の炉なり長期間の試験でずっと追うべきだ  
った。

Aさん： 同じようなことほかにもいろいろあります。

( 高温ガス炉と HENDEL に関する話題など 略 )

### —— 批判精神が大切 ——

Eさん： 安全に関する疑問はつぶされますよね。 誰がどういう意図でつぶしたかを明らかにしないと、疑問  
を阻んできたものを排除しないとならないのだけれど、そこが本質だと思うけれど、みんな「あー」となって  
終わる。小さな組織では、具体的に「部長が」とかあっても、大きなところではどこがガンなのか？

書記長： 個人的見解だけけど、最近テレビを見ていてここが原点かと思うのが、正力とか中曽根です。 そ  
こから延々と。たとえば原子力工学を作るときに、アメリカへ勉強しに行かせる。勉強するだけだと、自分  
で批判的に考えない。そんな風に原子力工学科を作る。第1期生に一人だけ、批判的な変な人が居た  
が、それをはじき出した。そんな風に脈々と変な文化を育ててきた。それが原子力村社会とか安全神  
話とか言われているものかなと。

Eさん： 理学から、原子力工学科に入ったのだけれど、非常に違和感があった。役人が講義しに来て、原  
子力の反対派に対して裁判でどういう風に反論したとか、延々と講義されることもあった。異様だった。

書記長： 多くの原子力屋さんは、単細胞、想像力貧困だと思っている。いろいろなことが起こりうることを考  
えない。たとえば、さる原研 OB、福島事故のすぐあと、新聞に「地震には耐えた。津波は見落としてい  
てやられた。しかし、事故は問題なく収束する」などと書いている。炉の状態がほとんど何もわかってい  
ない段階で、です。そんなのは、そうかもしれないことのひとつでしかない。スポーツ評論だったら、そん  
なことを言ってもよいだろうが、国の危機にかかわること、読み間違ったら大変なことに対してとっていい  
態度ではないと思う。

Bさん： われわれ、どうしたらいいですか。

書記長： ひとつは、「今まで指導的な立場にあった人はみんな責任とってやめろ」ですね。

???さん： それを言いますか。

書記長： 言いたいね。あとは、原点に戻って、研究者の発表の自由とかを処遇も含めて守るシステムを作  
り直す。別の場で、Gさんがいっていたけれど、上の人をみんなの投票などで選ぶとかを考える。それを  
やればよいと思っているわけではないけれど、ひとつの方策だと思う。それから、今まで進め方が間違  
っていたということをどれだけ反省するかではないですかね。

Eさん： 批判・検証的に見る視点が醸成されていないから。今回のことでも反省がないのでしょうか。 原子力  
工学科は分野が広すぎる。それぞれ先生は自分の分野はやっても、ほかの分野に対してもものをい  
えない。実際に言うだけの素養もないから、ほかのところには口を挟まないようにしようという気持ちがお  
互いに出てくる。それで相互に批判できない。批判的精神が無くなる。

書記長： 私など、原子力をあんまり、勉強しないほうがよいと思っている。なぜかという、いろいろ知識  
が大変でしょう、それであんまり勉強しているとそれに追いまわられて、個々のことを批判的に見る視点が



なくなってくる。いちいち検証してられないですから。それぞれは結構高度だし。そういう危なさが原子力にある。

Aさん： 広く浅くになってしまう。原子力工学科でなくと、物理屋とか引っ張ってくれば、何とかやれるのでは、と思うこともある。

( 新入職員に関する話題 略 )

―― 機構として何をすべきか？ ――

書記長： 今福島応援がメインだとか行っているけど、正直どうかと思う。福島応援は大事かも知れないが、自分の失敗を別のところで努力して取り繕っている様な印象を受ける。

委員長： 仕事の内容では、次世代高速炉の仕事を予定した人は、別の仕事になるなど、仕事の内容は大きく変わる人が出てくる。

書記長： それもあるけど、原子力機構が、元気に仕事を出来る職場として残るかどうか？

Eさん： 使命感を持ってやる人も居ると思います。

委員長： ひとつはクリーンアップセンター構想とかあります。動燃時代から、仕事が途切れないようにするのが上手。真面目に議論してやっているように見えないけど。真面目にやっていくつもりが見えないようにでも、つなぐ仕事をつくるのには一生懸命。原子力から、だいぶ離れているのだから関係ないと思っている人も多いかも知れないが、統合時、そういう部分を分割する話もあったから、機構に居られなくなることも考えられる。原子力機構がこれから何をすべきか、大きな問題。来年度の原子力予算9000億円のうち3500億円が除染ともいわれている。人は絶対に増えないと言われているので、仕事がシフトとして来るのは間違いない。

Aさん： 3500億？やる気がないのでしょか？そんな額で除染できるようなには思えないけど。

( 統合や分割関連の若干の議論など 略 )

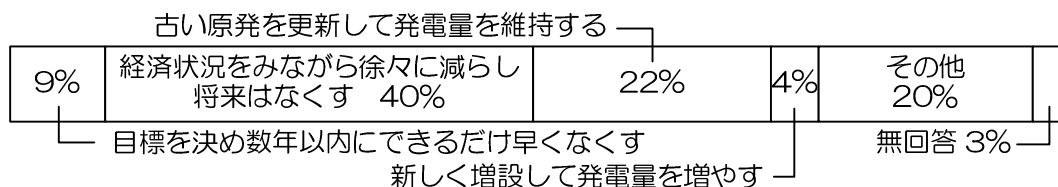
執行部： 今の議論、まとめた結論は出せませんが、ここで出た意見など、個人名は伏せたりして公表していきたい。

\*\*\*\*\* 閉会 \*\*\*\*\*

## あゆみ速報 63-16(2012年2月10日掲載)

2011年の末に実施した 組合員対象 2012 春闘アンケートより

問9. あなたは原発についてどのようにお考えですか。



(その他の意見)

- (1) 今の軽水炉は速やかに放棄し、本質的に安全な炉、廃棄物処理も考えた利用形態を研究する
- (2) 現在の原子力発電に代わる発電能力を持ったエネルギー源(核融合など)による発電が実用化されるまでの繋ぎとして使用し、徐々に減らしていけるように代替エネルギー源の開発を推進する。

- (3) 設計耐久年数約 40 年?を超えた原発は、すぐに廃炉にすべき。また、既存原発については福島原発の事故の解析や事故原因の究明などが明確になり、安全が担保できる保障および住民合意ができることが条件で稼働が可能と考えます。
- (4) 早急に廃止する
- (5) 危ないので利用しないに越した事は無いが、必要であれば利用する他ない。
- (6) できるだけ早く危険な軽水炉を停止させ、安全な次世代原子炉に建て替える。
- (7) 現在、軽水炉の研究はどこまで進んでいるのでしょうか?軽水炉の今後の見通しを明確にしながら新しい方法での原子力発電はできないのでしょうか?核融合も含め、将来のビジョンを明確にしながらの提案が必要なのではないのでしょうか?一般人のような議論では不十分でしょう。
- (8) 安全対策の充実
- (9) 今回の震災を踏まえ、初めから安全基準を見直し、それを満たさない炉はエネルギー状況を鑑みながら停止する。他のエネルギー減で補えない分は、新たに原発(より安全な)を作るもやむなし。
- (10) 震災等に対応できるような改造等を実施し現状維持していく
- (11) 一旦現存の原発を全て停止し、生活水準を下げた上で国民に運転再開の可否を問う
- (12) 次世代エネルギーの開発を進め、将来的に徐々に減らす

\*\*\*\*\*

## あゆみ速報 63-16(2012年2月10日掲載) 呼び掛け文

研究問題討論会を行います。

### 原子力のこれからをどうするか： その1

日時：4月11日(水) 18:30から

場所：原子力科学研究所構内、原研労組事務所

参加資格など：

組合員、非組合員どなたでも参加できます。

討論課題：

「原子力のこれからをどうしていくべきか」を

数回にわたって議論していきたい。

#### [ 行くか、やめるか、やり直すか ]

書記長 花島 進

大災厄をもたらした地震から一年たちました。福島支援など当面やらなければならないこともあります。しかし、わが国唯一の総合原子力研究開発機関に勤めるものとして、当面の対応だけでなく、これからどうすべきかを真摯に考えなければなりません。

今回の事故は、単にたまたま運の悪いことが起きたということではなく、わが国の原子力の弱さのあらわれです。なぜこのように脆弱なものを作ってしまったのか、できてしまったのかをよく考えなければなりません。

いま、新しい規制体制を作る議論の中で、原子力規制機関を環境庁の外局にするか、ある

いはより独立性の高い行政委員会にするかなどの議論があります。また規制にかかわる人材を、どのように得るのか、あるいは養成するのかといった難問もあります。

しかし最も大切なことは、今回の事故をどのように受け止め、反省し、その反省を将来に生かすことです。その反省なしで、組織図を描いても何もよいことはありません。今回の事故に責任がある人・組織は、現時点では、ほとんど責任をとってこないし、とらされてもいません。しかし、彼らは明らかに「失敗した」のであり、それは津波の高さや、東電の事故対処の問題ではありません。まさにどのような思想で、どのように想定をつくり、どのように備えるかというシステムの根本での失敗です。

国民の原発への懸念は高まり、まもなくわが国の全ての原子力発電所が止まることになるでしょう。われわれも含めた原子力関係者、原子力業界、学会などが国民から信頼を得るようになることは必要ですが、それは、単に信じてもらうことではなく、信頼にたる人・組織になり、信頼にたる技術・システムをつくらなければならないということです。

世間から「原子力村」とか「原子力安全神話」と批判される部分については、わが労組は以前より批判してきたものであり、先輩たちには、その批判的精神の故に差別され、あるいは不利益を受けてきた人も多くいました。今、ある意味でそのような差別・圧迫は今回の情けない事態を招くプロセスのひとつであったことは明らかです。我々自身の力の至らなさを反省しつつも、思っていることをどんどん言っていきましょう。

これまでの地位ある指導者たちは、将来へのまともな展望を持っていないでしょうから、我々が考える必要があります。

昨年11月に行った労組の討論会では、大学の教育の時点から、批判的思考のトレーニングがされていないことが指摘されていました。問題の根は深く、病は重いのです。じっくり考えて行きましょう。

\*\*\*\*\*

## あゆみ速報 63-24(2012年4月18日掲載)

2012年4月18日

声明：拙速な原発運転再開に反対する。

日本原子力研究開発機構労働組合 中央執行委員会

東北地方太平洋沖地震に続いた東京電力福島第1原子力発電所の事故は、3つの原子炉が炉心溶融、そして大量の放射能放出という事態に至り、地域住民そして我が国に大きな被害を与えた。原発事故の終息のめどは依然立っていない。

この事故について、発電所のどこがどのように壊れていったのか、何が壊れ、何が壊れなかったのか、あるいは機能不全にならなかったのかは調査に手を付けられない部分が多いだけにほとんどわかっていない。しかし、国、原子力委員会、原子力安全委員会、原子力安全・保安院そして電力会社たちが、「安全を守るためにはこれでよし」とした考え方が破たんしたことは間違いのない事実である。それは、そもそも原子力プラントに「どのようなことが起こりうるかをどのように想定し、どのように準備するか」という考え方の問題である。

「起こりえない」としてきたことがまとめて起きた。地震動や津波が想定を超えたこと、想定外の長時間の交流電源喪失が起きたことなどは、想定手法の間違いが現れた一側面に過ぎない。原子力は極めて大きなエネルギーと大量の放射能を扱い、大きな事故になれば国家的危機を招く。であるから、原子力の安全を真剣に考えるならば、今後、このような大きな想定外があってはならないことは、言うまでもない。

しかし、今、国や原子力安全・保安院は停止している原子炉を「ストレステスト」なるものを実施するだけで、「安全である」と強弁し、運転を再開しようとしている。それは、基本的には福島で起きたことを見て、若干想定を変えた高さの津波や地震動でどうなるかを机上で分析する、あるいは福島で起きた全電源喪失に対する一定程度の対策が出来ているかを見るだけである。「ストレステスト」は、原発のサイトに何が起こりうるのかを想定する手法が破たんしたという現状をしっかりと認識した上での原発の安全確認からはほど遠いものである。問題は、地震動の数百ガルの違いや津波の高さの数メートルの問題ではない。

ストレステストの実施者、検証者の資格も問題である。今回の事故に対する前述の認識に立てば、間違った「これでよし」の基準を作ってきた電力会社、原子力安全・保安院、原子力安全委員会をはじめとする関係者が明確な責任を取らず、そのままの地位にいてテストやテストの検証をしたとしても、全く信用できるものではない。

一方、「電力なしでは生活できない」などと発言する政界人がいると聞く。電力の供給は重要であり、需要に応じて制限なしに供給できるとすればそれはそれで意味がある。しかし、「原発稼働なし」が、直ちに「電力なし」ではないことは言うまでもなく、原発を動かさないと電気がなくなるかのような発言は問題である。ましてや、当面の電力に対する渴望を理由に、原発を根拠なしに「安全」というのは犯罪的な行為である。また、電力会社が、福島事故を見た上で、既存の原発を再稼働できない事態に備えていないとすれば、電力会社としての責任を果たしているとは言えないであろう。

原子力関係者の立場では、先に述べた失敗の根源を認識し、目先の運転や、目先の国民の理解、目先の面目などを横に置き、本質的な問題の解明と将来へ向けての考え方を作っていくことが被害の軽減の次になすべきことである。

たとえ数千年に一度の天災であっても、広範な放射能汚染で国を危機に陥れるようなものは運転すべきではない。拙速な原発運転再開に反対する。